

[論 文]

社会学的教育実践としてのサービラーニング

SERVICE-LEARNIG As an Educational Practice of Sociology

吉 良 伸 一

Kira Shinichi

授業カリキュラムに組み込まれたボランティア活動などの地域活動（コミュニティーワーク）を海外ではサービラーニングと呼ぶ。アメリカでは1980年代から盛んに行われるようになったが、我が国では2000年以降、教育GPや現代GPなどの競争的資金の導入とともに大学教育に取り入れるところが出てきた。社会学から最も近いところの教育実践であると思われるが、社会学で十分に研究されているとはいいがたい。大学の社会的貢献が強調される中で、サービラーニングとはいったい何なのか、我が国の社会学教育の中にどのように取り入れるべきなのか、少し整理してみた。あわせて、大分県立芸術文化短期大学での「体験をスキルに変えるナラティブ能力育成—サービラーニングを中心とした自己の物語を探し創り発信する能力の形成プログラム—」（以下、ナラティブ能力プログラムとする）が、大学教育推進プログラムに選定され、平成21年度から23年度の3年間、文部科学省の財政的支援のもとで、取り組みの充実と情報発信を行うこととなった。今後の取組の充実のためにサービラーニングについて考察をまとめてみた。

1、アメリカにおけるサービラーニング

授業カリキュラムに組み込まれたボランティアなどの取組を、海外ではサービラーニングと呼ぶことが多い。一般的にボランティア活動を取り入れた教育手法として理解されている。プラグマティズムの代表的存在であるウィリアム・ジェームス（William James, 1842-1910年）やジョン・デューイ（John Dewey, 1859-1952年）を思想的原点とするといわれる¹。彼らは実社会での体験や行動をとおした教育の重要性を20世紀の初め頃から主張した。

ジョン・デューイは、子どもたちの自主的な活動と、学校と社会を結びつける活動の、重要性を主張した。子どもたちの自主的な活動を取り入れることは、アメリカの教育現場に早くから受け入れられたが、学校と社会を結びつける活動が受け入れられたのはかなり後のことになる。学校という社会の閉鎖性の故かもしれない。今日のサービラーニングの多くが、学生たちの企画や討論・グループワークや発表などの自主的な活動をもとに、学校と社会を結びつけ、社会に貢献する活動を展開している。

ウィリアム・ジェームスは、『戦争に変わる道徳的行為 The Moral Equivalent of War』（1910年）において、平和国家建設の現実的方法として、兵役に変えて、若者を数

年の間、社会建設事業などに従事させ、市民としての意識を高める取組を提唱した。その後、アメリカにおいて、市民保全部隊（Civilian Conservation Corp 大恐慌後、失業した若者を国土保全に活用した）や平和部隊（Peace Corps）などの活動が国家によって行われ、ナショナルサービスと呼ばれた。こうした活動はジェームスの思想を原点とし、広い意味でのサービスラーニングの一つと考えられている。

1969年、アトランタでサービスラーニングの名のもとに研究集會が開催され、大学や地域の関係者がサービスラーニングのあり方についての論議を行った。1970年代には連邦政府も高校生や大学生のボランティア活動に支援を始める。サービスラーニング活動を行う高校や大学への財政的支援、教員や指導者への指導・助言、情報提供雑誌の発行が始まる。1985年、ブラウン大学・ジョージタウン大学・スタンフォード大学の学長と全米州教育協議会代表によるサービスラーニングの大学連合組織「キャンパス・コンパクト Campus Compact」が創設される。こうした状況の下で、学生の社会貢献活動は活発化した。が、教科と関連させて社会貢献活動を行っているとする高校はわずかであった。キャンパスコンパクトはカリキュラムとの関連のない社会貢献活動は全学的支援が得られないと考えて、学問と社会貢献活動の統合活動（Integrate Service with Academic Study）を開始する。1990年代になって学科教育と結びついたサービスラーニングが急速に拡大していく。キャンパス・コンパクト加盟大学は1989年202大学から1999年には639大学、2008年には1100校である。1999年の全米調査では46%の高校、38%の中学、25%の小学校でサービスラーニングが行われている²。1993年クリントン政権はラーン・アンド・サーブ・アメリカ（Learn and Serve America）を設置しサービスラーニングに対する助成金を交付したが、ブッシュ政権の元で予算が削減され、また学力重視の政策によって、2004年には高校42%・中学31%・小学22%と減少が見られる。2006年のキャンパス・コンパクトの調査では加盟大学においてサービスラーニングに取り組んだ学生は32%、サービスラーニングを取り入れた科目数は平均35科目、教員評価にサービスラーニングへの取組を取り入れたとした大学は35%となっている³。

2、我が国での展開

2005年に日本学生支援機構が収容定員2000人以上の大学の3分の2で行った『学生ボランティア調査』⁴では、現在している18.1%、以前したことがある47.1%、65%の学生がボランティアの経験ありと答えている。1997年の調査では、現在している7.2%、以前したことがある33.5%で、したことがあるが24.5%も増加している。全米では3分の2の大学生が現在ボランティア活動に関わっているという調査結果があり、実際に行っている学生を比べると少ないが、経験者はかなり多くなったといえよう。男性より女性、社会福祉系・教育学部系で経験者が多い。内容は「子どもたちにスポーツ、レクリエーションなどの指導をする」39.8%、「自然や環境を守る」37.4%、「お年寄りや障害のある人を助ける」28.3%などとなっている。活動のきっかけは「自発的意志で」55.6%、「大学のサークルなどで参加する機会があつて」42.5%、「友人や知人に勧められて」23.2%などが多く、「福祉施設や学校などの呼びかけに応じて」10.3%、「授業でボランティアやNPOのこ

とを学んで」6.8%と、学校をきっかけにした活動はあまり多くない。ボランティアの形態は、「大学内のボランティアグループの活動として」35.1%、「大学外のボランティアグループ・団体の活動として」26.6%が多い。「大学の正課として」は7.0%（前回3.3%）と少ない。現在行っているボランティア活動へ満足している64.8%（前回56.8%）、満足していない11.0%（23.0%）と満足が増えている。満足している内容は、楽しかった75.5%、ものの考え方や見方が広がった66.6%、友人や知人を得ることができた56.0%などが多い。不満の理由は自分の思うとおりの活動ができなかったが48.8%と多い。ボランティア活動の動機は困っている人の手助けがしたいが経験者で41.1%・未経験者52.6%、地域や社会をよりよくしたい経験者34.6%・未経験者30.2%、新しい人と出会いたいから経験者34.6%・未経験者30.9%、新しく感動できる体験がしたいから経験者29.2%・未経験者25.8%、自分のやりたいことを発見したいから経験者18.2%・未経験者15.7%である。経験者の方が人との出会いや感動など自分の役に立っていることを知るものが多い。大学がボランティア活動奨励策をとるべきが45.9%、いいえが33.6%、前回と変化はない。奨励方法は学校の単位として認定する39.7%（前回39.5%）、ボランティア関連の授業科目を開設する34.0%（前回項目なし）、情報提供をする26.1%（前回37.9%）となっている。サービスマーケティングへのニードは増大していると見られる。

文部科学省の調査では、ボランティア活動を取り入れた授業科目を開設している大学は1996年では100校、2004年では255校、ボランティアに関する講義科目を開設している大学は1996年72校2004年198校となっている。文部科学省が大学などでの教育改革の取組を促進するため実施している、「特色ある大学教育支援プログラム（特色GP）」、「現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代GP）」及び「質の高い大学教育推進プログラム（教育GP）」、平成21年度から「大学教育・学生支援事業」のテーマA「大学教育推進プログラム」などによって、ボランティア活動やサービスマーケティングが急速に取り入れられている。

3、ボランティアとサービスマーケティング

1977年、厚生省は都道府県指定都市社会福祉協議会をつうじて、小中高校をボランティア協力校として指定する「ボランティア協力校」制度を開始する。当時154校であった指定校は2002年には1万6349校に拡大している。1990年には中学校、高校のクラブ活動に「奉仕的な活動」が学習指導要領に加えられたが、大きな注目が集まったのは1995年の阪神・淡路大震災と、「生きる力」形成の柱として「総合学習」にボランティア教育が取り入れられた。1990年以降、ボランティア教育が政策的に導入されているが、その目的は「生きる力」・「豊かな人間性」などきわめて曖昧である。こうした曖昧さは、参加者の人間性や社会性を育めばなんでもボランティアなのか、安価な労働力として都合よく利用される可能性はないのか、滅私奉公的なご都合主義に利用されないか等、ボランティア教育の実践して困難な問題をもたらしている。教科学習と対置させ周辺的な経験教育と取り扱われる危険性がある。現在でも少なからぬ教員がボランティアに熱心な学生は教科学習に手を抜く傾向があると考えている。しかし、本来、学習と経験は背反するものではない。

く、よく考えられたプログラムにおいて両者は互いに共鳴しあうものではないだろうか。

ボランティアは一般に善意や自主性に基づく活動であるとされる。それは「する側」の動機や意味から理解することであり、ボランティアにはそれだけでは説明できないものがある。それは他者との関係性のもとに初めて見えてくる。ボランティアはその語源からしても自発的な意志によって動くものを意味する。それは全く誰からも影響されずに内発的に動くことを意味するものではない。多くの場合、他者の苦痛や問題、人々の危機感といったことに触発されて起こるものである。自発性とは、自分の責任で状況を判断して価値判断を行い行為することを意味する。無償性は自発性を担保する重要な条件である。一定の時間的対価を得れば、労働としての性格が強くなる。ボランティアにおける自発性や無償性といった性質は、効率性や経済性、固定的な方法に縛られることなく柔軟な対応をとれることを意味する。相手の状況に応じて柔軟な対応をとれる、他者との人間的信頼関係を構築して、当事者にとって自尊感情を回復し、安心して発言できる空間を用意し、潜在的な問題やニーズを掘り起こし、新たな公共性を形成する。

Jacoby, B. (1996) は『今日の高等教育におけるサービスラーニング』において、serviceとlearningがおなじウェイトを持つべきだとしてservice-learningという言葉を用いるべきであるという⁵。学習や成長は活動の結果として自然に起きるものではなく、注意深く設計されたプログラムの結果として、より豊かな成果が得られる。活動に関連した科目があること、仲間やリーダーとの討議、サービスを提供した人からのフィードバックなど、「省察」が重要である。また、サービスラーニングに不可欠の要素として「互惠」を指摘する。活動に関与するすべての集団が学習者である。サービスを提供するものとされるものといった一方的関係ではない。相対的に能力や資源を多く持つものが、そうでないものを助けるといった、伝統的ボランティアリズムや伝統的・温情主義的な一方的アプローチではなく、他の人のために何かをするのではなく、他の人々とともに何かをすることが、重要であると考え。慈善ではなく正義の実現、サービスを提供することではなくサービスを必要とする状況を改善することが求められている。もちろん、ネットワーク論などのボランティアの今日的定義においては、ボランティアの省察や互惠といったことは取り入れられている。しかし、我々が教育プログラムとして実践すべきはサービスラーニングであると考え。

4、我々の実践

情報コミュニケーション学科は心理学・社会学・情報メディア・情報科学の4つの領域から成り、情報化に対応する能力とともに対人的コミュニケーション能力を身につけた地域を担う人材の育成を目的に1992（平成4）年に設置された。1993（平成5）年から地域で活躍するリーダーを招いて講演をお願いする地域社会特講を開始した。以降、この講義を通じて多くの学生が地域活動やボランティア活動に積極的に参加してきた。2002（平成12）年、FIFAワールドカップ日韓共同開催を契機に、多くの学生が大分青年会議所の歓迎行事に参加したことから、大分青年会議所の協力を得て、インターンシップをはじめた。このころから、湯布院映画祭・おおいたたなばたま祭り・上野の森アートフェスティ

バル・大分川リバーフェスタ（現在は中止）などに多くの教職員や学生が参加するようになった。2007（平成19）年度から、学んだことを地域で役立てる、地域で行動することで学ぶことの意義を知り、自信力を高めることを目的に、サービラーニングを単位化した。2008（平成20）年度からは、サービラーニング（1単位1・2年いつでも履修可能）・インターンシップ（1単位1年前期）・海外語学研修（2単位1・2年）のなかから2単位を選択必修とした。海外語学研修に行かなかった学生は1単位はサービラーニングを履修することとなった。地域社会特講（情報コミュニケーション学科必修・他学科は共通教育科目）で関係団体の方に講演をお願いし、学生の参加を呼びかける。地域イベントの企画・運営・参加、NPO法人との連携、学内外での情報発信、学内外での環境活動など、多くのプログラムを学科の教職員とともに設定し、多くの学生が参加できるよう心がけた。活動の内容は地域社会特講の時間を使って、発表会で学生自身によるプレゼンテーションを行い、関係団体や本学教職員の評価を受けた。また、アンケートなどによって学生自身の評価やプログラムの効果を測定し、充実を図った。①サービラーニングを中心に地域活動・ボランティア活動・環境活動をとおして、社会学・心理学などで学んだことを活かすとともにその意義を学ぶ。体験しながら考え、考えながら行動する体験型学習を実施する。②サービラーニング発表会・社会調査発表会・卒業研究発表会などを行う。③学内報・学科ホームページ・学科紹介DVD作成、大学案内作成などを通じて、広く社会にその内容を知ってもらう。考える・行動する・表現する・情報伝達するという4つのプロセスを遂行する能力を養うことで、コミュニケーション能力の高い地域に根ざした人材の育成をめざす。2009（平成21）年度文部科学省大学教育推進プログラムに選定され今後の取組の充実と情報の発信を現在行っている。

5、サービラーニングの効果

平成21年2月、情報コミュニケーション1・2年生に対してサービラーニング等の教育効果を測定する目的でアンケート調査を実施した。1年95名（回収率66.4%） 2年71名（65.7%）の回答を得た。あわただしい卒業研究発表会を利用して実施したため、あまり回収率はよくない。このアンケートでは、サービラーニングの単位を受けた123人（74.0%）、単位はとらず42人（25.3%）、インターンシップ単位を受けた103人（62.0%）、海外語学研修単位を受けた9人（5.4%）となっている。次のような項目について入学前と現在の状況を1（ない）から5（非常にある）の5段階で答えてもらった。

質問文 入学する前と、現在のあなたを比較して、次の項目に上げた力が、客観的にどの程度身に付いたかを5段階評価して、1～5に○をつけてください。

項 目	内 容	入学前				現 在					
		非常に	まだ	まだ	非常に	まだ	まだ	非常に			
前に踏み出す力(action)	一歩前に踏み出し、失敗しても、粘り強く取り組む力	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1
主体性	物事に、進んで取り組む力	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1
働きかけ力	他人に働きかけ、巻き込む力	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1
実行力	目的を設定し、確実に行動する力	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1
考え抜く力(thinking)	疑問を持ち、考え抜く力	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1
課題発見力	現状を分析し、目的や課題を明らかにする力	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1
計画力	課題の解決に向けたプロセスを、組み立て準備する力	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1
創造力	新しい価値や考えを生み出す力	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1
チームで働く力(team work)	多様な人とともに、目標に向けて協力する力	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1
発信力	自分の意見を、分かりやすく伝える力	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1
傾聴力	相手の意見を、丁寧に聞く力	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1
柔軟性	意見の違いや立場の違いを、理解する力	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1
状況把握力	自分と周囲の人々や物事との関係を、理解する力	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1
規律性	社会のルールや、人との約束を守る力	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1
ストレスコントロール力	ストレスにうまく対応して耐えたり発散する力	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1

サービスマーケティングの単位を受けた学生と受けなかった学生について、Mann-whitneyによる2個の独立サンプルによるノンパラメトリック検定⁶の結果、有意な差があった項目を示す。前に踏み出す力・主体性・考え抜く力・課題発見力・計画力・チームで働く力・情報発信力・規律力の8項目の現在の評価で差が出た。入学前では有意な差がある項目はなかった。もともと、自信や積極性などのある学生がサービスマーケティングに参加するから、差があると見ることもできるが、入学前では有意な差がないことから、サービスマーケティングの効果はあると考えることができる。

・ 前に踏み出す力	現在		1	2	3	4	5	平均ランク
	単位を受けた	100.0	1.7	8.4	37.8	49.6	2.5	87.78
	単位を取得せず	100.0	2.4	17.1	51.2	24.4	4.9	69.01
・ 主体性	現在							
	単位を受けた	100.0	1.7	10.0	39.2	41.7	7.5	88.52
	単位を取得せず	100.0	4.9	17.1	56.1	14.6	7.3	66.85
・ 考え抜く力	現在							
	単位を受けた	100.0	0.0	9.2	39.5	46.2	5.0	88.15
	単位を取得せず	100.0	2.4	14.6	56.1	22.0	4.9	67.90
・ 課題発見力	現在							
	単位を受けた	100.0	0.0	9.2	38.7	44.5	7.6	88.25
	単位を取得せず	100.0	2.4	17.1	51.2	24.4	4.9	67.63

・計画力 現在								
単位受けた	100.0	2.5	11.9	39.8	39.8	5.9	88.69	
単位を取得せず	100.0	2.4	26.8	48.8	17.1	4.9	66.35	
・チームで働く力 現在								
単位受けた	100.0	0.0	6.7	23.3	49.2	20.8	88.94	
単位を取得せず	100.0	4.9	4.9	46.3	36.6	7.3	65.61	
・情報発信力 現在								
単位受けた	100.0	1.7	7.5	49.2	32.5	9.2	87.35	
単位を取得せず	100.0	7.3	14.6	51.2	22.0	4.9	70.27	
・規律力 現在								
単位受けた	100.0	1.7	5.8	17.5	50.8	24.2	87.84	
単位を取得せず	100.0	0.0	9.8	34.1	46.3	9.8	68.83	

次に、現在の状況について、5段階で自己評価してもらった項目の中から、有意な差のあるものを示す。

・事後の反省を忘れない		1	2	3	4	5	平均ランク
単位受けた	100.0	1.6	9.0	39.3	32.8	17.2	87.66
単位を取得せず	100.0	0.0	14.3	54.8	26.2	4.8	69.36
・目標を設定することができる							
単位受けた	100.0	1.6	11.5	38.5	31.1	17.2	87.11
単位を取得せず	100.0	4.8	16.7	40.5	35.7	2.4	70.98
・勉強をする際、目的を持っている							
単位受けた	100.0	0.8	12.3	39.3	36.1	11.5	87.72
単位を取得せず	100.0	4.8	26.2	33.3	31.0	4.8	69.18
・興味を持って授業に取り組むことができる		1	2	3	4	5	ランク
単位受けた	100.0	3.3	10.7	37.7	41.8	6.6	87.75
単位を取得せず	100.0	2.4	19.0	52.4	21.4	4.8	69.08
・情報を整理し必要があればすぐに調べる							
単位受けた	100.0	1.7	11.6	44.6	38.8	3.3	87.22
単位を取得せず	100.0	2.4	21.4	50.0	21.4	4.8	70.65
・マニュアルに頼らず自分で手順を考えることができる							
単位受けた	100.0	4.1	24.6	41.0	24.6	5.7	87.69
単位を取得せず	100.0	7.1	33.3	47.6	9.5	2.4	69.26
・立場や価値観の異なる人の意見を尊重することができる							
単位受けた	100.0	0.8	5.0	33.6	42.9	17.6	87.76
単位を取得せず	100.0	2.4	7.3	43.9	46.3	0.0	69.05

・多くの人前で話すことができる								
単位受けた	100.0	10.1	18.5	43.7	20.2	7.6	88.31	
単位を取得せず	100.0	19.5	22.0	51.2	7.3	0.0	67.45	
・相手の質問や疑問に答えることができる								
単位受けた	100.0	1.7	21.0	54.6	20.2	2.5	87.82	
単位を取得せず	100.0	4.9	41.5	36.6	17.1	0.0	68.88	
・結果を予測した取り組みができる								
単位受けた	100.0	2.5	11.8	46.2	33.6	5.9	87.80	
単位を取得せず	100.0	2.4	17.1	65.9	9.8	4.9	68.95	
・集中して授業に取り組むことができる								
単位受けた	100.0	3.4	12.6	39.5	35.3	9.2	88.41	
単位を取得せず	100.0	7.3	26.8	39.0	24.4	2.4	67.14	
・継続力があり、結論が出るまで取り組むことができる								
単位受けた	100.0	2.5	14.3	46.2	30.3	6.7	88.86	
単位を取得せず	100.0	7.3	29.3	43.9	19.5	0.0	65.85	
・失敗を恐れずチャレンジすることができる								
単位受けた	100.0	4.2	17.6	46.2	21.8	10.1	87.40	
単位を取得せず	100.0	12.2	22.0	46.3	19.5	0.0	70.11	
・努力した結果として達成感を大切にす								
単位受けた	100.0	2.5	4.2	31.9	39.5	21.8	88.05	
単位を取得せず	100.0	7.3	7.3	41.5	36.6	7.3	68.20	
・結果について自己評価を行い、次の取り組みに活かすことができる								
単位受けた	100.0	0.8	9.2	49.6	33.6	6.7	88.80	
単位を取得せず	100.0	4.9	22.0	53.7	14.6	4.9	66.01	

勉強をする際、目的を持っている・興味を持って授業に取り組むことができるなどの項目で有意な差がある。地域活動などに熱心な学生は学科科目にも熱心に取り組んでいることがわかる。

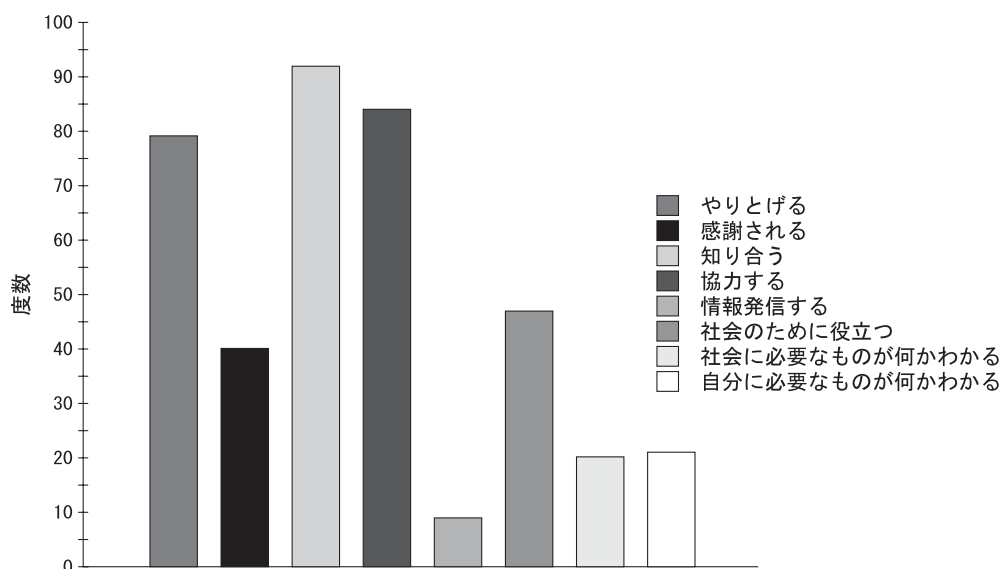
あしなが学生募金・Pウオークは、毎年春と秋にあしなが育英会が行っている学生募金とPウオーク10の参加者である。地域社会特講や現代と人権などであしなが育英会の歴史や活動について説明し参加者を募っている。地域社会特講ではあしなが奨学生に直接呼びかけてもらっている。日本最大規模の学生募金であるあしなが学生募金については関心を持つ学生が多く、多くの学生が参加する。繁華街での街頭募金であり、最初はなかなか声が出ないが、そのうち声をそろえたり工夫をはじめ。よく知られた活動であるのでトラブルも少ない。平成21年度春の活動ではのべ100名以上の学生が参加し、本学学生の集めた募金額は4日間で100万円を超えた。募金だけでなくなかにはボランティアスタッフとしてあしなが育英会の活動に参加していく学生も出ている。あしながPウオーク10は500円の参加費を払って10キロを歩きながら遺児たちと交流する。毎年春と秋の2回であったが平成21年度から秋1回になっている。ここで集められた募金と参加費は各国のエイズ遺

児・災害遺児などの支援に使われている。この活動は本学の学生であしなが奨学生であった学生が呼びかけてはじめたものである。

サエモン23は、旧熊本藩の飛び地であった大分市鶴崎地区で、加藤清正の命日である7月23日に行われる祭りである。国指定の無形文化財「鶴崎踊り」の「左右衛門」のリズムをベースに作曲・編曲を行い、踊りの振り付けを考え、チームを作って踊る。平成21年度は音楽科専攻科生が作曲、振り付けはダンスサークルが行った。国道197号線を歩行者天国にして行われ、毎年3万人の人出で賑わう。平成21年度からステージの企画運営を依頼され、和太鼓サークル・ダンスサークルの参加や鶴崎クイズなどを実施運営した。美術科美術専攻1年生が中央ステージに絵画作成、イラストサークルや工芸科専攻生が模擬店を出店した。また、専用の袋にゴミを集めると綿菓子と交換する、環境サークルの学生と協力して開催中からゴミを集めるなど、学生の企画で実施した。ダンスチームに50名・企画運営に40名・壁画作成に10名が参加した。3回ほど鶴崎の街に案内して、歴史や会場を見るほか、地元の人々との交流を持った。

大分たなばたまつりではまつりの朝からリリース用の風船をつくり、青年会議所メンバーと約1万5千個の風船をふくらました。夕方からの打ち水やめじろんダンス、たなばたブロードウェイに参加し、運営を手伝った。約50名が参加し、来年度からは企画から参加する予定である。おおいた親子劇場・湯布院映画祭・キャンパスカフェ・日韓次世代交流映画祭などは5月頃から毎週会議を持って企画を進めている。30名程度であるが熱心な活動を行っている。

サービラーニング成果の項目



上の図はサービスマーケティングの単位取得者について、サービスマーケティングの効果とされるものが達成されたかを訊いたものである。知り合う・協力する・やり遂げるなどでは評価が大きい。社会のために役立つ・感謝されるでは半数程度、社会に必要なものがわかる・自分に必要なものがわかる・情報発信するでは評価が低い。情報発信などは参加者と非参加者で有意な差が出ていたが、サービスマーケティング単体では効果が低いと判断しているものと思われる。地域社会論・グループワーク・プレゼンテーション論など関連科目が情報コミュニケーション学科にあるが、他学科に拡大するためには中核となる科目だけで効果を上げる工夫が必要である。このような結果を踏まえ、自分の物語を創り語り発信する「ナラティブ能力育成プログラム」を実施している。サービスマーケティングと並行して「ナラティブ能力プログラム」の時間を作り実施する。活動の意味や歴史を教えながら活動のための話し合いを行う、活動後は、発表に向けての指導を行い・発表会・ホームページ・新聞作成・動画作成を行う。地域社会特講・サービスマーケティング・ナラティブ能力プログラムをコア科目として、メディア・情報科学・心理学・社会学などの関連科目を有機的に結びつけると行った工夫を行っている。海外におけるサービスマーケティングなども検討中である。少子高齢化が進む中、大学や短大は学問だけでなく地域に対して何らかの貢献を行うべきである。また、今の学生にとってそれはきわめて貴重な経験となるはずである。

-
- 1 <http://www.servicelearning.org/>による。
 - 2 Abstract of A Profile of high School Community Service Program by Fred Newmann and Robert Rutter, Education Resource Information Center.
 - 3 2007Service Statics, highlights and Trends of Campas Compact's Annual Membership Survey, Campus Compact.
 - 4 『学生ボランティア活動に関する調査報告書』、平成18年3月、独立行政法人日本学生支援機構。
 - 5 Jacoby, B. 'Service-Leaning in Today's Higher Education', "Service-learning in Higher Education : Concept and Practices", Jossey-Bass. 山田一隆訳、「今日の高等教育におけるサービスマーケティング」、『ボランティア教育の新地平』、ミネルバ書房、2009（平成21）年
 - 6 SPSS ver.17.0 For Windows